

筑波大学日本文学会会報

第38号

2014年2月

筑波大学附属図書館所蔵和刻本漢籍について

(清登典子)

日本文学会だより……………	1
研究室だより……………	3
卒業生だより……………	4
日本文学会教員学生名簿……………	8
	9

筑波大学附属図書館所蔵和刻本漢籍について

清 登 典 子

和刻本漢籍とは、中国人により漢文で書かれた書物（漢籍）のうち日本に舶載され日本で出版されたものを指す。和刻本漢籍には多くの場合、日本人による訓点や送り仮名が付されているが、訓点者によって訓点や送り仮名の付け方に違いが見られ、それはそのまま訓点者の解釈を示すものと捉えることができる。したがって、和刻本漢籍とは、単に出版されたのが日本だというだけでなく、日本人によって解釈され、翻訳された漢籍と言うこともできるだろう。とくに多くの漢籍が和刻本として出版された江戸期の文人たち（芭蕉、西鶴、秋成、馬琴など）の知識、教養の基盤を知る上で、こうした訓点の付された和刻本漢籍の存在を無視することはできない。彼らがどのような訓点、送り仮名付きの漢籍を読んでいたのかを知ることが、彼らの漢籍理解のあり方と結びつくものであり、彼らの文体にも大きな影響を与えたと考えられるからである。こうした和刻本漢籍の重要性を思うとき、和本についての戸籍簿ともいえるべき『国書総目録』に倣い、「和刻本漢籍総目録」というような全国的な規模での所蔵先情報を含む目録の必要性が痛感されるところである。実は、筑波大学附属図書館には多くの漢籍とともに多くの和刻本漢籍が所蔵されているものの、所蔵される和刻本漢籍の目録などは今までのところ存在しておらず、その総数を含め、内容や特色なども明らかにされないことがない状況にある。

そこで平成二十二年度から「筑波大学附属図書館所蔵和刻本漢籍の調査・研究」に関する学内プロジェクトを立ち上げ、小松建男先生、稀代麻也子先生、谷口孝介先生などと一緒に、三年間にわたって附属図書館の和刻本漢籍についての基礎的調査に取り組んできた。その調査を通じて、本学附属図書館には約5000点以上の漢籍が所蔵されており、そのうち和刻本漢籍が約1730点余り存在することが確認できた。これは予想を超える数字であり、まずはこれらの和刻本漢籍を有効活用するための目録作成が急務であると判断し、目録作成に取りかかることとした。その結果、これまでに「経部」「史部」「子部」「集部」という四部分類ごとの電子版目録をほぼまとめることができた。すでに三年間にわたるプロジェクト実施の時期は過ぎているのだが、その成果のとりまとめとして、現在、四部分類ごとの目録を総合した、「本学附属図書館所蔵和刻本漢籍総合目録」の電子版完成にむけてデータの統合、整理などを行っているところである。今後はさらに、和刻本漢籍一点一点についてデータと照合しながら調査、確認し、目録の精度を高めていく必要があるだろう。この学内プロジェクトに取り組むことで、私自身多くのことを学ぶことができた。とくに異なる領域をも含むさまざまな分野の先生方と一緒に調査、研究、目録作成などに取り組むことで、多くのご教示や専門的知見をお示しただけなことは何よりも大きな喜びであった。

また、和刻本漢籍についての調査を行う中で、本学附属図書館にはかなりの数の朝鮮版漢籍が所蔵されていることに気づかされた。中でも「養安院」の蔵書印の押された「養安院本」は、秀吉が朝鮮に出兵した際に朝鮮から我が国に持ち帰り、曲直瀬正琳（まなせ・しゅうりん、養安院）に寄贈した、いわゆる「朝鮮渡り本」を含む貴重な蔵書として知られるものである。私も日本文学史の講義の中で近世の出版文化成立に触れる際には、「朝鮮渡り本」について述べてきていたのだが、その歴史的な書物が本学附属図書館に所蔵されていると知って驚くとともに大変感激した。その後、本井牧子先生より、昭和二十年代に教育大学附属図書館所蔵の「朝鮮渡り本」についての調査報告がなされていることをご教示いただいたが、現時点での「朝鮮渡り本」の所蔵状況を含め、附属図書館所蔵の朝鮮版漢籍についても今後本格的な調査、研究を行う必要があると考えている。

このように、本学附属図書館には貴重な書物が文字通り山のように存在しており、研究、教育上の活用を待っている。大学院生にもぜひ積極的に活用してほしいと願っている。